Keep learning, Love everything

司書になってから初めての夏休み、2013 年 7 月、私は一人でボストンへ向かった。あつよしおじさんとマーサに会うためだ。

写真は、私が持って行ったフィルムカメラで、おじさんが私たち三人を撮ってくれたものだ。場所はボストンの市街地から 2 時間ほど車で行ったところにある、公文書館の前だったと思う。写真が得意だったおじさんが撮ってくれた写真には、どれも生き生きとした笑顔が写っていた。

おじさんは父の親戚で、私の祖父母に大変世話になったと話していた。妻のマーサはイタリア系アメリカ人。初めて会ったのは、私が小学校低学年のとき。来日した際に、私たち家族の家に来てくれた。私が絵が好きだと聞いていたマーサは、『赤ずきん』の絵本や、ファッションの歴史について書かれた本をプレゼントしてくれた。もちろん英語の本である。何が書いてあるのかはさっぱりわからなかったが、挿絵やイラストを見ているだけで楽しかった。その本は、今も大事に持っている。

二人は毎年、お正月に電話をくれた。「文香、英語を勉強しなさい。英語は世界を広げてくれるよ。」と毎年話してくれた。その言葉を思い出しながら、図書室で英語の勉強に励んだ。

大学生になった夏、二人が来日した際に再会した。英語が話せるようになって、マーサといろいろな話ができることが嬉しかった。大学時代は「いつも図書館にいる」と言われるくらい、図書館に通って課題や卒論に取り組んだ。

卒業旅行はボストンに行くと決めていた。初めての一人での海外旅行、不安だらけだったけれど、二人はあたたかく迎え入れてくれて、ボストンの街をゆっくり案内してくれた。そのとき、たまたまかもしれないが、ボストン市立図書館にも連れて行ってくれた。

私はその後、一般企業に就職したがうまくいかず、1 年足らずで辞めてしまった。自分が好きな場所で仕事をしようと決め、アルバイトで図書館に勤め始めた。その間に司書資格を取り、時間はかかったが幸運にも司書になることができた。

私が司書になったことを報告したときも、二人は心から喜んでくれた。直接報告したいと思い、夏休みを使ってボストンへ向かった。
卒業旅行のときとは違い、司書という職業に少しでも役に立つようにと、市立図書館はじめ、近隣の大学図書館や、写真の公文書館にも連れて行ってくれた。また、二人の自宅の落ち着いた赤い壁、無造作に置かれたたくさんの写真や骨董品、可愛いキッチン、料理上手なおじさんがつくるパンやピザ、お洒落なマーサからもらったアクセサリー…写真を見るとすべてが愛おしく蘇ってくる。ニュースを見ながら、時に政治の話にもなった。当時はオバマ政権だった。

この夏、おじさんが亡くなったと聞いて、すぐマーサにテレビ電話をした。悲しくて仕方ないだろうに、私の髪型を褒めてくれるマーサは私の大切な友人だ。おじさんとマーサから受けたたくさんの愛を、今度は私が周りの人たちに返していく番だ。司書という仕事、そして一人の人間としての指針を二人から学んだように思う。